

土地にこだわり百二十五年 祖母に教わった節操と誇り

新琴似・黒田家当主

くろだ とおる
黒田 徹 さん



新琴似兵村の家屋番号一〇六番―四番通りを挟んで第三中隊本部のはす向かいに、遠く鹿児島県から弱冠二十歳の青年屯田兵が入植した。その黒田熊次郎の末裔は、今もこの地に暮らす。百二十五年の歴史を経て、街並みは大きく変貌し、札幌市の有形文化財に指定された中隊本部とそれを包む森だけが、ひっそりと当時の面影を伝えている。そんな兵村の変遷とともに屯田兵たちの思いがどのように受け継がれ、子孫らは未来に何を託そうとしているのか、黒田家の現在の当主である徹さんにお話をうかがった。



ば、どんなものでしょうか？

一つの象徴的な例があります。今現在、新琴似と呼ばれる地域にはラブホテルが一軒もない。この種の営業は、案外地元に古くから住んでいる人がやっているものですが、ここ新琴似では、言ってみると住民意識の中に根付いた「節操」みたいなものが働いていたのだと思います。「ここまではやるけれど、それ以上はやらない」みたいな。やはり、屯田兵としてのプライドみたいなものが、この土地にはずーっと息づいているのではないかと思っています。

確かに、私が生まれた昭和二十年代には三百戸ほどあった農家のうち屯田兵の血筋の方は二十戸余りに減っていました。で

ご自宅の玄関には「丸に並び鷹の羽」の家紋をかたどったプレートが掲げられ、下に添えられた「SINCE 1887」の文字がどこか誇らしげ。

―明治二十年の入植から百二十五年たったこの街に屯田兵の匂いが残っているとすれば、

も、そのほかの家は、屯田兵とまったく無関係であったわけではなかったはず。屯田兵の開いた土地を引き継ぎ、屯田兵がどのように村を動かしてきたかを直に見てきたからこそ、彼らの「誇り」とか「誉れ」みたいなものも受け継ぎながら一世紀にもわたる歴史を刻んできたのだと思うのです。

―琴似町新琴似から札幌市新琴似町となった昭和三十年代は、屯田兵ゆかりの人々が随分活躍したようですね。

行政の動かし方を熟知していた末裔たち

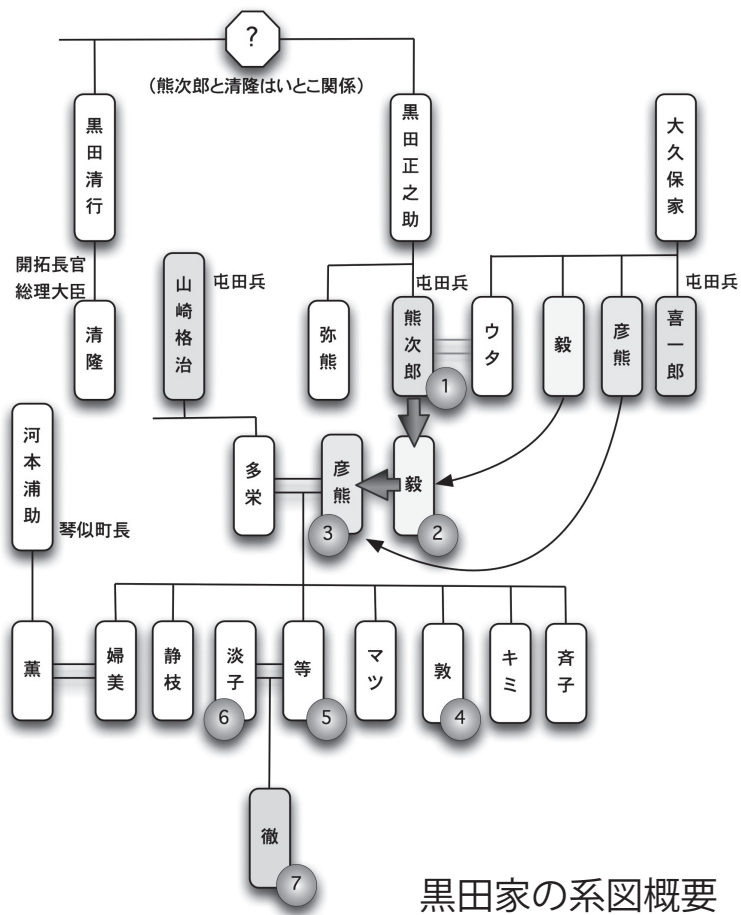
ええ、その時期に現在の都市としての基盤が形づくられたとも言えます。札幌市政に地域の声を反映させるためには、市議会に議員を送り込まなければだめだ、ということ。屯田兵二世の菅進さんを担ぐとともに、今言う「住民運動」も活発に展開しました。私が中学生のころに、北二十四条までだった市電を新琴似まで延ばしたのも、屯田



イラスト：三田まさひろさん

兵といつか新琴似の住民パワーでした。既に国鉄札沼線の新琴似駅がありましたから、市電が東区方面に延びてもおかしくなかったけれど、これがベースになって、地下鉄も麻生まで通ったわけです。当時は中学一年生で、開通記念電車の窓から旗を降りながら薄野との間を往復したのを今でも覚えてます。北二十九条あたりの西側の札幌飛行場の跡地には戦闘機格納庫の

残骸が残っていました。東側は牧場が広がっていたと思います。その「住民パワー」の核に屯田兵魂のようなものがあつたということですか？



黒田家の系図概要

精神的なものというよりも、考え方だと思えます。当時のリーダーたちは、行政の考え方をよく知っていた連中。菅さんを先頭にまちづくりに奔走した顔ぶれを見ると、九州諸藩の藩政を担ってきた武家の血を引く人々です。黒田家は薩摩です、私の祖母・多栄(たえ)の山崎家(明治二十一年、山崎格治さんが新琴似入植)は大分県中津藩の末席家老の家柄だと、おばあちゃんからよく聞かれました。そんな血筋からか、御上とは反対の側にあつても、行政を動かすツボを心得ていたからではないでしょうか。

—その黒田家の血筋について「私は三・五代目かな」と「屯田(第46号)」に書かれていますね。

七代にわたって家督を継承

初代に当たる黒田熊次郎は、弟の弥熊を伴って



祖母の多栄さん

新琴似に屯田兵として入植しました。熊次郎が早世したため、婚約者の大久保ウタの兄で、同じ鹿児島出身の屯田兵・大久保喜一郎の末弟の毅が家督を継ぎました。その毅が長じて船乗りとなり、やがてビルマで病死したことから、大久保家の次弟・彦熊夫婦が子どもを引き連れて黒田家を継承したのです。

—明治二十三年に起きた中隊本部襲撃事件は、首謀者として熊次郎さんに無期刑が言い渡されたものの真相については諸説あるようです。祖母の多栄さんからは何か聞いていますか？

襲撃事件の「真相」いやというほど聞かされた

小中学生のころに何度も聞かされました。その話によると、悪者は中隊長で、給与米をくすねた。それを知って憤った者たちが一団を組んで襲撃した。首謀者はほかにいたが、家族持ちだった。家族がいなかったのは熊次郎だけで、正義感というか義侠心みたいなものから首謀者として名乗り出た。後は弟の弥熊に託した。これをいやというほど聞かされました。

大人になってから自分なりに知識を得て、「そんなに単純なものではなかったのでは」と思うようにもなったけれど、事件当時に多栄は物心つく歳になっており、ある程度の真相は知っ



ていたと思います。

「おばあちゃんとしては義憤から出た行為で、汚名をすすぎたいという思いがあったのでしょうか？」

汚名といった感覚はなかったと思います。事件後に黒田家の者が周りから疎外されたということも聞きませんし、私自身も、「罪人の子孫だから」といった目で見られたこともなければ、その逆を感じることもありませんでした。私なりに真相を推理したこともありましたが、上官を襲ったことは歴史的事実ですし、黒田清隆につながる人物として熊次郎が

死刑を免れたのもどうやら真実だと思っています。清隆の縁者なので裁く側が困ったという話は、書物でも読んだし、おばあちゃんからも聞きました。

いずれにしても、この事件は積立米どころというよりも、もっと複雑な事情が絡んで起きたことだと感じています。特に、琴似と山鼻の屯田兵が官軍として出征した西南戦争（明治十年）では、西郷隆盛ら旧薩摩藩の出身者らが打ち負かされました。九州には旧豊津藩士ら西郷軍に与する者もいれば、官軍・征討軍には同じ薩摩出身がいるなど、いわば隣同士で殺し合いをしたのです。新琴似兵村には、負けて職なくて流れ流れて屯田兵に応募してやって来た者もいたでしょうから、何か遺恨のようなものを引きずっていた可能性はあると思うのです。

――明治式で数えると徹さんの七代目まで、屯田の地と屯田兵の血が受け継がれてきたのは、なぜでしょうか？

土地にこだわり、土地を生かす道を選んだ

やはり、原生林を切り開くところから始まった、この土地へのこだわりだと思います。彦熊の長男である伯父・敦は、非常に優秀な人物で、大蔵省から満鉄（南満州鉄道会社）に出向し、満州からの送金を元に新琴似の地所を広げていったそうです。その弟の父も、いったんはサラリーマンになりましたが、戦後の農地改革から土地を守るために農業に戻りました。です

から、私の子ども時代は生業が農家で、同じ屯田兵の子孫で一族を挙げて耕作地拡大を図った人達に比べると、私のところは貧農でした。

――昭和三十年当時は、黒田さん宅の一带も一面畑が広がっていたようですね。

黒田家に割り当てられた土地は、四番通りを挟んで中隊本部

と向き合い、隣は練兵場でした。兵屋の割り当ては、抽選で決められたものですが、黒田家に比較的条件の良い土地が与えられたのは、黒田清隆とのつながりから特別の配慮があったからではないかと想像しています。

麻生の帝国製麻の工場がなくなり、跡地が道営麻生団地となったところから、新琴似の宅地化が急激に進み、生徒数の増加を予測して我が家の土地の一部が収用されることになりました。これを機に農業を廃業し、貸家業に転換したわけですが、私自身は「土地活用は、地元の役に立つもの」という考えでやってきました。

良い伝統を未来へ

特に、四番通りは、その立地環境から住民生活にとって利便性の高い商業地としての発展につながるものを目指してきましたつもりです。スイミングスクールや格安ファミリーストランなどで、最近ではマンション計画が持ち込まれましたが、商業性を考えてカーディーラーにしました。これからは人口減少が進み、高齢世帯が徐々に増え、商業活動に影響が出てくる懸念があります。屯田兵入植以来の良い伝統を引き継ぎながら、より住みよい街に発展していくことを願っています。

（聞き手・梶田博昭）



新琴似の現在の街並み（上）と昭和35年ころの黒田家の農地（下）

